

# St. Luke's International University Repository

A qualitative study on nursing role through four mothers' experiences in raising a very low-weight-birth infant from birth to a year and 6 months old

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 智美, 平林, 優子, Ono, Tomomi, Hirabayashi, Yuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00014773">https://doi.org/10.34414/00014773</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 極低出生体重児を育てる母親への看護の役割

## — 出産から児が1歳6ヵ月になるまでの母親の体験を通して —

小野 智美<sup>1)</sup>、平林 優子<sup>2)</sup>

### 要 旨

本研究の目的は、極低出生体重児を育てる母親の出産や育児の体験と、その体験の母親にとっての意味を明らかにし、看護を行う上での一助とすることである。研究方法は、研究時点で明らかな発達障害が認められない2歳の極低出生体重児を育てる母親4名に、各1回の家庭訪問を行い、子供が1歳6ヵ月に至るまでの母親の妊娠、出産、育児に関する体験と母親の認識や気持ちを語ってもらった。母親の体験や認識を母親にとっての意味を考察しながらカテゴリー化し、その関係を検討した。分析の結果、母親たちの体験は、母親が心に描く子供の姿と現実の子供の姿の距離の関係性において、【一致する】、【一致しない】、【近づく】の3つに分類された。母親は子供が退院するまでに「極低出産体重児を出産した」という体験に一区切りをつけるような育児の土台となる過程を経験していた。母親は標準的に生まれて育つ子供の育児に追いつこうとして迷いや揺らぎを経験する中で、《育児上の選択と迷いからの開放》《成長・発達への焦りや不確かさの解消》《前を向いての育児の舵取り》《母親の育児上の満足感の拡大》《極低出生体重児であると意識した育児の方向性の獲得》という5つの体験を通して子供を見失わないように育児を調整していた。

看護の役割は、母親が上にあげた5つの体験をうまく利用して育児を調整し、母親自身が安心できる育児を選択し遂行できるよう、また時間的、精神的ゆとりがもて、育児を楽観視できるように支援することであると考えられた。

#### キーワードズ

極低出生体重児    母親    育児体験    出産体験    看護援助

## I. はじめに

近年、低出生体重児の育児をめぐる母親の不安や育児ストレスの増加、虐待などの問題が取り上げられるようになった。極低出生体重児では育児上の困難を生じる要因はさらに大きいと考えられるが、母親側からの出産や育児の体験についての研究は少ない。本研究は、極低出生体重児を育てる母親の出産や育児の体験が、育児を行う母親にとってどのような意味をもつのかを明らかにし、看護を行う上での一助とすることを目的としている。

## II. 研究方法

研究時点で明らかな発達障害が認められない極低出生体重児を育てる母親4名に、各1回の家庭訪問を行い、母親の妊娠、出産、育児に関する体験と母親の認識や気持ちを語ってもらった。育児については、今回は子供が歩くという発達の区切りを考え、子供が1歳6ヵ月に至るまでの母親の体験とした。母親の体験や認識を母親にとっての意味を考察しながらカテゴリー化し、その関係を検討した。プライバシーの保護や質問への拒否の権利があることなど倫理的配慮は書面と口頭で行った。

## III. 結 果

1) 聖路加看護大学大学院博士前期課程  
2) 聖路加看護大学大学院

### 1. 対象の背景

子供の出生時体重は926~1108gで、年齢は2歳3か月~2歳11か月であった。3人は第1子で、1人が第2子であり、母親は26~30歳で、面接時点では全員専業主婦であった。

### 2. 母親の出産・育児における体験

母親の育児体験は、『極低出生体重児の出産という土台』の上で成り立っていた。またその体験は『母親が心に描く子供の姿と現実の子供の姿との距離の関係性』において、【一致する】【近づく】【一致しない】

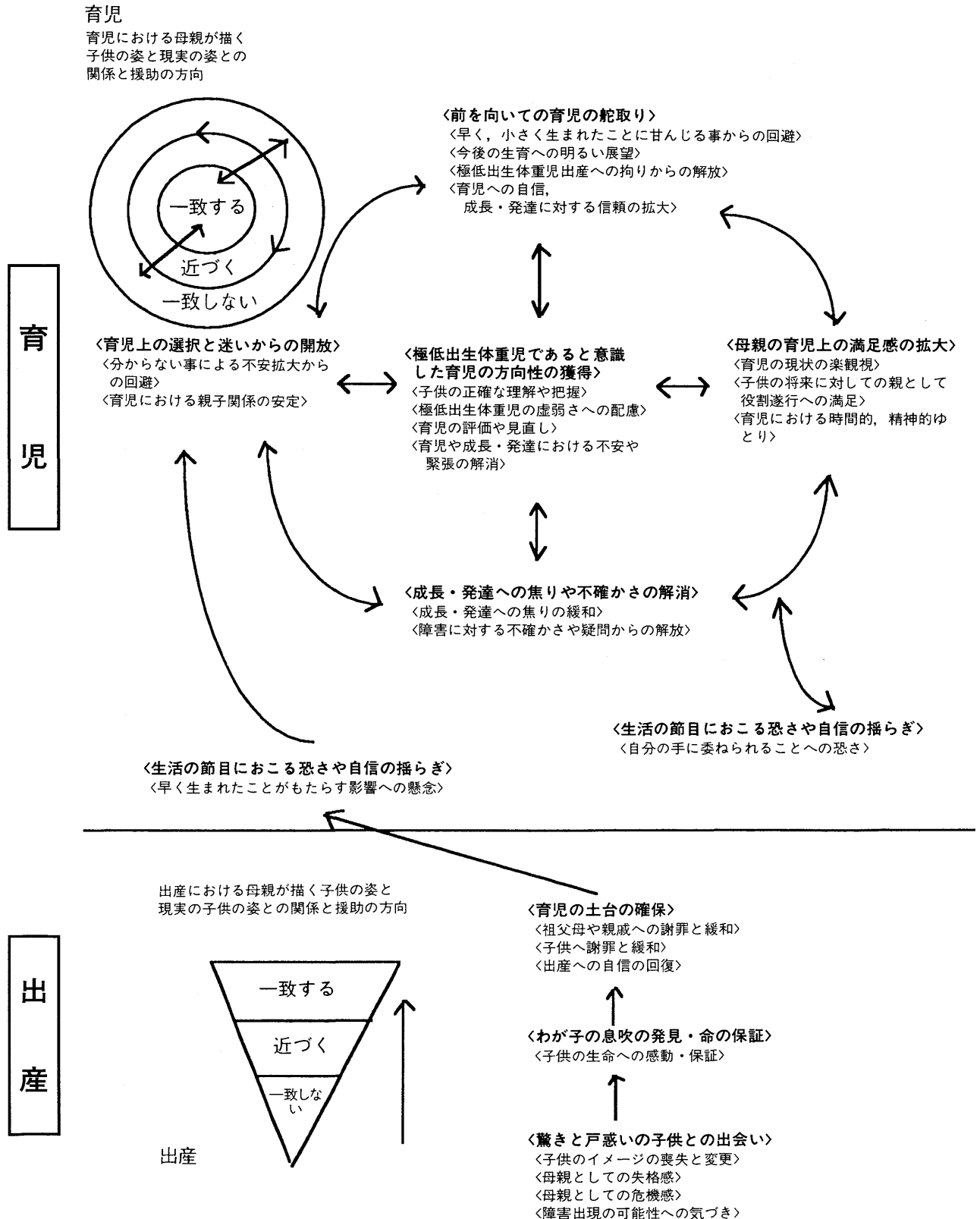


図1 極低出生体重児をもつ母親の出産・育児における体験図

に分類され、さらに10のカテゴリー《 》とサブカテゴリー〈 〉に分類された。(図1参照)

#### 1) 極低出生体重児の出産における母親の体験

##### (1) 《驚きと戸惑いの子供との出会い》

母親は「えーっこれが私の子？」という、心に描く子供の姿と現実の子供の姿とが一致しない体験から子供との関係が始まる。「近くにいながら母乳を飲ませることも抱くこともできない孤独な時間」や「本当に育つのだろうか」という思いから、〈母親としての失格感〉や〈母親としての危機感〉を感じる。

##### (2) 《わが子の息吹の発見と命の保証》

やがて母親は「小さくても似てるんです」と、毎日の面会による気づきや、子供が呼吸器から離脱することでわが子は生きているんだ、大丈夫なんだという実感を得ていく。ここで母親が描く子供の姿は現実の子供に【近づき】、子供もまた日々の小さな成長によって母親が描く子供の姿に【近づいていく】。

##### (3) 《育児の土台の確保》

母親は入院中に、祖父母と保育器にいる子供との面会方法を祖父母が不安にならないように調整したり、「子供に痛い思いをさせている」と認識することで、〈子供や祖父母へ極低出生体重児出産に対して謝罪〉する。また「出産の原因を理解する」ことによって〈出産への自信を回復〉する。母親が現時点まで心に残している育児の土台と思われるこれらの体験を通して、心に描く子供と現実の子供の姿が【一致する】。

#### 2) 極低出生体重児の育児における母親の体験

母親は退院が近づくと「うちに連れて帰っても大丈夫かな」という〈自分の手に委ねられることへの恐ろしさ〉を覚え、《退院という節目におこる恐ろしさや自信の揺らぎ》によって引き起こる不安な思いから自宅での育児が始まる。母親は育児においてネガティブな出来事に会うと、心に描く子供の姿と現実の子供の姿とにずれが生じ、ずれの拡大を回避するために、5つの体験を通して心に描く子供の姿と現実の子供の姿を【近づけたり】、【一致させる】ことによってその距離を調整する。

##### (1) 《育児上の選択と迷いからの解放》

「アトピーならしょうがない、現代病だから」と理由づけをすることによって〈分からない事による不安拡大を回避〉したり、離乳食がすすまず焦る思いを、子供が感知することによる悪循環を断ち切るために「ミルクを飲んでるからいいや」と譲歩し、〈育児における親子関係の安定〉を測る。

##### (2) 《成長・発達への焦りや不確かさの解消》

母親は「人より遅れて歩くだらう」とあらかじめ遅れることを予測し、〈成長・発達への焦りを緩和〉したり、母子手帳や身体発達曲線と子供の発達曲線の角度や距離を比較する。また健診で一緒になった子供の

検査の種類や数と比べることによって障害出現の可能性を探り、〈障害に対する不確かさや疑問から解放〉する。このことは母親が心に描く子供の姿に【近づける】ことによってその距離を調整する体験である。

##### (3) 《前を向いての育児の舵取り》

「親が普通に生まれたんだって思っていないと、子供が小さいからできないんだって思うようになるから」と〈早く、小さく生まれたことに甘んじる事を回避〉したり、「小さい時に大変な思いをしたから大きくなったらちょっとやそつとじゃへこたれない」と危機的状況を経験した過去をポジティブに転換することによって〈今後の生育への明るい展望〉を見いだす。また「普通に生まれた子供にも小柄な子供はいるし、「夫婦が小柄だと子供は小さめだろうから」と子供が小さい原因を広く捉え直すことによって〈極低出生体重児出産への拘りから解放〉する。

##### (4) 《母親の育児上の満足感の拡大》

「双子で小さく生まれて、脊髄の原因で歩けない子も知ってるから」と比較対象を選択することによって〈育児の現状を楽観視〉したり、「近くの幼児教室に参加して、この子もちゃんと頑張っついてきてくれるんで」と〈子供の将来に対する親としての役割遂行に満足〉する。この体験は母親が心に描く子供の姿に現実の子供の姿を【近づける】ことによってその距離を調整していると言える。

##### (5) 《極低出生体重児であると意識した育児の方向性の獲得》

「未熟児特有な事は病院や未熟児を育てるお母さんに相談する」と相談内容によって相談相手を選択し、〈子供の正確な理解や把握〉に努めたり、「上の子とは違うから気をつけなきゃ」と〈極低出生体重児の虚弱さに配慮〉して母親は子供が極低出生体重児であることをふまえながら育児をすすめる。また「産院での検査やアドバイスに安心する」と出産時の危機を乗り越えることができた病院で〈育児や成長・発達における疑問や緊張を解消〉したり、「ズバズバ言ってくれ、現実的だから聞いててためになる」と保健婦のアドバイスによって〈育児の評価や見直し〉をする。母親は子供が極低出生体重児であると意識したうえで育児の方向性を定める。これらは母親が描く子供の姿と現実の子供の姿とが【一致する】体験である。

## IV. 考 察

### 1. 母親の出産・育児の体験と意味

母親は子供が退院するまでに、「極低出生体重児を出産した」という体験に一区切りを付けるようなひとつの過程を経験していた。その過程の中で母親は、現実目に見える子供を、自分が育てていく子供として描けるようになる体験をする。つまりは「一致す

る」という経験を一旦ここで行うことは、その後母親が育児を行う上で、現実の子供の姿を見失ったり、迷いが生じた時に、現実の子供を見つめ直すという原点の体験になり、育児の土台となっていると考えられた。

子供が退院し、家庭での育児が始まると、一旦は一致した現実の子供の姿と母親の描く子供の姿にずれを生じるような出来事にしばしば出会うことになる。母親は現実の子供の姿に合わせた育児を行いつつも、標準的に生まれて育つ子供の育児に追いつこうとして、迷いや揺らぎを経験する。その迷いや揺らぎは、本当にこのままで正常に成長・発達していくのだろうかという不安や、結局は小さく生んでしまったせいなのだという思いに行きついたりする中で、安心できる育児の方針を決定しづらいことからくるものだと考えられた。通常の子育ての中にもある揺らぎだけではない、極低出生体重児であるから生じるその迷いの中で、母親は強い不安に陥ってその子を見失う、すなわち一致しない体験にならないように、結果にあげた5つの体験を通して育児の仕方の調整を行っているものと考えられた。特に子供の成長や発達が測られるような時は育児上の迷いや揺らぎは大きく、一致しない体験に近づくと考えられた。

## 2. 看護の役割

育児において、子供の生命や成長・発達に揺れるような揺らぎや迷いを経験し、ゆとりを持ちにくい環境の中で育児をすすめる母親への看護の役割は、母親が5つの体験を利用して育児を調整し、母親自身が安心できる育児を選択し遂行できるよう、また時間的、精神的ゆとりがもて、育児を楽観視できるように支援することであり、こうした支援が母親が現実の子供を見

つめ、認めてゆけるようになることにつながっていくと考えられた。今回、母親の病院における体験が退院後の育児においても重要な役割をしていることが明らかになり、病院における看護の重要性を再確認した。さらに退院後も母親らの専門家への信頼は大きく、特に出産し危機的状態を乗り越えた病院への信頼が大きいこと、また生活の節目に母親の心の揺らぎや不安が大きいこと等を考慮すると、近頃盛んに報告されている病院でのフォローアップや地域との連帯において、母親の日々の体験を受けとめ、支援することは看護職の役割であると考えられた。今後は、母親が現実の子供の姿とは一致しない方向へ子供をとらえ直すことが明らかになった生活の節目を重視し、子供の発達に沿ってさらに継続した研究が必要である。

## V. 結論

1. 驚きと戸惑いの中で出会った子供を、自分が育てていく子供として母親が描けるようになる「一致する」という退院前の体験が育児の土台となっていた。
2. 育児上の迷いや揺れが大きく、育児の方針を決定しにくい環境の中で、母親は5つの体験を用いて育児の仕方を調整していた。
3. 看護の役割は母親が5つの体験をうまく使っているかを見極め、母親が安心できる育児を選択し遂行できるように支援することである。

## VI. 今後の課題

研究対策が4例と少なく、振り返りの情報であったため、今後は事例数を増し、経時的な情報を得ることで更なる追求が必要である。

## <参考文献>

- 1) 唐田順子：未熟児をもつ母親の受容に関する研究，小児保健学会誌，41，628-629，1994.
- 2) 宮中文子：ハイリスク新生児を出産した母親の育児の自律に関連する要因について，小児保健研究，49(4)，429-434，1990.
- 3) 横尾京子：極小未熟児の親子関係—入院中における両親の心理的・情緒的变化，母性衛生，26(1)，110-116，1995.
- 4) 吉本 妙 他：極小未熟児を出産した母親の感情の特徴，小児看護学会抄録，26，163-167，1995.

## **A Qualitative Study on Nursing Role through Four Mothers' Experiences in Raising Very Low-weight-birth infant from Birth to a Year and 6 Month-old.**

Satomi Ono, Yuko Hirabayashi  
(St. Luke's College of Nursing)

The purpose of this study was to describe mothers' experiences and the significance of their experiences in raising a very low-weight-birth infant from birth to 18 months old in order to be helpful in nursing. The author performed a home visit to 4 mothers of 2 year old children without an obvious handicap and got them to talk about their experiences and cognition regarding their pregnancy, birth and child-rearing. Then, mothers' experiences were classified into three groups: "agree" "approach" "disagree" in the relation between the child's personality imagined by his mother and his real personality consideration of their meanings for mothers. Mothers had experienced a process such as "Having given birth to a very low-weight birth infant" which broke off their experience until their children's discharge, and which was a foundation of their child-rearing. Mothers experienced a great deal of waver and perplexity in order to attempt to catch up with the raising of children born by standard weight. Mothers coordinated waver and perplexity through these five experiences: release from choice and perplexity in child-rearing; solution of irritation and uncertainty about growth and development; steering child-rearing facing future; magnifying mothers' satisfaction in child-rearing; determining guideline of child-rearing her child of very low-weight birth. The role of nurse is to promote and support mothers regarding the following: making use of the above five experiences skillfully; having leisure in time and mind; taking an optimistic view of child-rearing.

### **KEY WORDS:**

Very low-weight-birth infant, Mother, Child-rearing experience,  
Birth experience, Nursing